

・児童劇団やまびこ座「どろぼうがっこう」

やまびこ座さんの講評を書くのが楽しみでならない。なにより舞台が楽しいもので、楽しんでいたからだ。個性的なキャラクターの活かし方、組み合わせ方、先生の器の大きさ、ストーリーのわかりやすさ、特に照明の扱い方に関しては素晴らしく、効果的に飛び道具的な照明を扱われていて、メリハリがあり良かったです。豆球も良かったです。なによりの、この舞台の成功は、【先生のつつこみ】をおくことで、【常に舞台が安定していた】ことです。どんな個性も、いやらしくなく素直に見ることができたのは、個性的な発言で場が荒れてもそれにつっこみ、安定する。というのがしっかり成り立っていたからで。それが、この舞台の魅力の大きな要因であった。ただ、場転の段取りの荒々しさがあったのは目についた。中身の稽古で、精一杯だったのか、中身で勝負しているのか定かではありませんが、もう少し段取り良くなるような気もしました。でもまあ、これは講評を書くということで書いているだけで、上演に対してお客さんは、気にならない範囲だったかと思います。あと、気になったところといえば、物語に関して、冒頭から結末まで「どのような興味でお客さんを引っ張るか？」ということに関しては、もうひとつ工夫があったようにおもう。「どろぼう学校」で、未熟な泥棒たちが、一人前になっていくというだけではなく、「どろぼう」しなきゃいけない【強い動機】が欲しかったです。

例えば、先生が冒頭でさらわれてしまってその救出に行くために孤軍奮闘する、とか。（でも先生のツッコミは必要なので、舞台上にはいるが、牢屋の中という設定で、無線でやり取りしてつつこんでいるとか・・・）すると、生徒が「先生」を救うために「どろぼうして、成功しなくては！」という最後までお客さんをひっぱれる【強い動機】が生まれたかと思います。これだけ面白い構成なのだから、そういった全体を引っ張る【動機】をどのように見い出して行くか？というあたりのケアがあると更に良くなるかと思います。ふくろうはこの物語にとって如何に重要か？ということなども知りたかったです。にしても、ラストの歌、良かったですね。なにより、児童劇団やまびこ座に入団して仲間に入りたくなるほど、魅力的で、個性豊かで、あたたかみのある舞台で、最高でした。

村上慎太郎